

てとり

vol. **22**
2025.3

企業と地域の
つながり方



地域とともに成長する 銀行を目指して



CSR（企業の社会的責任）やSDGs（持続可能な開発目標）の広がりにより、地域に関わる企業が増えてきています。助成金、寄付、清掃活動などのボランティア、行事やイベントへの参加、共同プロジェクトによる地域課題の解決など、その方法も多岐に渡ります。

企業を支援する立場の地元金融機関である株式会社鳥取銀行地域戦略部地方創生グループの田中周さんに、鳥取県内の傾向と鳥取銀行としての地域との関わりも含めてお話を伺いました。

とりぎん青い鳥基金

私が所属する地方創生グループという部署ではとりぎん青い鳥基金という地域づくり団体を対象とした助成プログラムを行っています。この取り組みは鳥取銀行の創立50周年を記念して、2000年から社会貢献事業として始まったものです。

当初は青少年の健全育成、文化振興の活動への支援が中心でしたが、2020年からはSDGsの視点を取り入れながら、教育とまちづくりの活動に対して助成を行っています。

地域貢献が趣旨ではありませんが、普段は接点がない方々に当行の活動を知っていただくきっかけにも繋がるものと考えています。

また、融資などだけではなく、こうした形でも鳥取銀行が地域の活動に対して力になれるものがあると当行の行員にも感じられるものだと思います。

とりぎん青い鳥基金の他には、地域のイベントやお祭りへの参加、清掃などの地域活動への協力などを行っています。



地域との関わり



株式会社鳥取銀行
地域戦略部 地方創生グループ 田中 周さん

8年ほど前に3年間集Lab.を運営する株式会社シーセブンハヤブサに就任してました。当行は、八頭町が地方創生の総合戦略を策定する際の関わりから始まり、そこから集Lab.の計画にもともに関わりました。地域のシンボルである学校が閉校となり灯りが消えてしまう、賑わいをつくりたいと願う地域とともに、当行としても事業者が減少していく中で、新しく企業が創業できるような場をつくりたいという想いで一緒に取り組んできました。

私自身としては地域の現場を肌で感じられ、より地域に関わりたいと考える機会になりました。

地域のコーディネーター

社会貢献やボランティアは良いことだからやらなきゃいけないではなく、自分たちが生き残るためにだったり、自分たちがより成長するために必要なことなのだと思います。

当行は、地域の銀行として本来の業務であるお客様の抱える課題に対して、融資やソリューションを紹介することで企業活動のお手伝いをしています。その中でも地方創生グループでは個々の取り組みを面的な動きに変えていく、自治体と連携した取り組みで地域の価値向上につながるような目標で、地域課題の解決に向けた動きを行っているつもりです。また、地域の金融機関に必要な機能、役割として、ネットワーキングも重要だと思います。

現在地元でビジネスや様々な活動をしている方はもちろん、これから何かやってみようといった方とも関係性を構築していければと思います。たくさん地域の情報を蓄積して上手く地域のハブになる、そうしたコーディネーターの役割も担えたらと思っています。

鳥取銀行が地域でビジネスをやっていくためにも地域を元気にしていく必要があります。今後も地域とともに自分たち自身も成長するための土台づくりとして社会貢献活動を行っているのだと考えています。

特集

4 企業×地域づくり



東 部

中国電力株式会社
鳥取支社

中 部

三和段ボール工業
株式会社



西 部

株式会社 米子青果



設立10周年記念

10 つながるフォーラム

記念講演

「参加」が創り出す
人口減少社会の希望



第2部

ミラ・クル・とっとり
プラットフォーム
交流会



高校生ing

14 地域と学校の 架け橋を担う 高校生



鳥取県立鳥取中央育英高等学校

当センターは、「ミラ・クル・とっとり運動」を推進しています!

「ミラ・クル・とっとり運動」とは、県内の活動者が互いにつながりあい、それぞれの活動の活性化と地域課題解決の推進を目指す運動です。運動に参画する個人・団体同士がフラットに、ゆるやかにつながるネットワークとして、「ミラ・クル・とっとりプラットフォーム」を展開しています。



株式会社鳥取銀行 地域戦略部 地方創生グループ

所在地/鳥取市永楽温泉町171番地

連絡先/電話: 0857-37-0263

メール: furusato-sousei@tottoribank.co.jp

Webサイト/ <https://www.tottoribank.co.jp/index.html>

Webサイト



「日も。百年も。地域と共に歩む。」

【東部】中国電力株式会社鳥取支社



企業と地域の
つながり方

私たちが当たり前のように過ごしている日常を、事業を通して支えているのが企業活動だろう。そのように地域と密接に関わりあう企業の地域貢献活動を取材しようと、電力供給というまさに生活の土台を支えている中国電力に話をうかがった。最近では町や企業と連携して商品開発を行うなど、さまざまな地域貢献活動を行っている。

ダムが誕生

「前の所長が『ダムってワッフルに似ているよね』と気づき、ダムの麓にあるお店と協力して商品開発ができたからおもしろいね」と言い出したところから始まり、昨年8月に『三滝ダム豆乳ワッフル』を発売することができました」と話すのは、智頭町にある三滝ダムを管理している中国電力東部水力センター鳥取土木課で、ワッフル開発に携わった安部山未玖さん。同センターは水力発電に使う県東部22ヶ所のダムの設備維持・管理を行っている、安部山さんも通常業務をこなしながら地元産の豆乳スイーツ専門店「粒と雲」と打ち合わせなどを行っている。



安部山未玖さん

「ダムの運用やメンテナンスは、地元の理解がないとできないことです。我々の仕事の理解促進の一環になり、観光資源にもなればと思ったのが始まりです。智頭町さんに提案をして地元のお店とつながることができました」

これまでも、全国的にダム好きから人気を集めているダムカードの制作などはあったが、自社で地域と連携して商品開発を行うことは初めて。経験がないなかでも、ワッフルを通して地域にダムがあることをもっと知ってもらおうと挑戦。すでに店頭販売や自社イベントでの配布など人気を集めており、さらにダムを連想するパッケージの改良などを進めている。



事業を知ってもらおう 大切さ

地域活動によって、社員の意識も変わる。法人担当をしている販売推進課エリアマネージャーの飯田優衣子さんは、同社が鳥取大学と連携して行う「SDGs 工作&わくわくEスクール」に参加したことで、普段とは違う視点で事業や地域のことを考えたという。



飯田優衣子さん

「仕事では法人のお客さまと話をすることが主なので、ビジョンのある学生と一緒に何かに取り組むこと自体が新鮮でしたし、若い人たちにとっても地域の方々にも何かしら届けられる種まきになると思います」
イベントでは、SDGsに取り組む大学のサークルが中心となり、地域の小学生を対象にSDGsの話をした後、中国電力も電気に関する知識を伝え、エコ工作などで楽しんでもらいながら環境意識を高めること

事業理解を深めることにつなげている。

「この活動を通して地域とのつながりを改めて感じますし、地元と向き合いながらやっていくという思いを、もっと姿勢や行動で示していきたいです」と意気込む。



地域あつての事業

ほかにも、ラグビー、卓球、陸上といった実業団チームによるスポーツ教室を各地で開くなど、地域活動に力を入れている。鳥取支社広報グループマネージャーの北野広樹さんが思いを語ってくれた。

「弊社の経営理念の一つに、『地域とともに成長します』ということがあります。昨年には地域への思いを改めて確認し、『一日も。百年も。』という新しいブランドメッセージをつくりました。私たちの仕事は、地域があつてこそ。地域と同じ目線で、同じ未来を見て成長していきたいように、地域と近い距離にある企業であり続けたいと思っています」

安部山さんも、働きながら改めて自分たちの仕事が地域の暮らしを守っていることを実感するという。

「ダムの水の一部は、灌漑用水として使われています。災害があつた時に水がうまく供給されないという声を聞くと、改めて自分たちの仕事の先には、暮らしを守るために農業をしている地域の人がいると分かる。目の前のことだけじゃなくて、いろんなことを想像してやっていかなければいけないと思います」

暮らしと密着しているからこそ、地域のすぐそばにある企業に。社会貢献活動を通して、その距離を縮めながら、共に未来へと歩む。



中国電力株式会社 鳥取支社

所在地／鳥取市新品治町1番地2
連絡先／電話：0857-24-2241
Webサイト／<https://www.energia.co.jp>

Webサイト



段ボールの可能性を広げ、地域の未来を創る。

「中部」三和段ボール工業株式会社

自分たちの持っているものを、どうやって地域に生かすことができるだろうかと模索、挑戦を続けている企業がある。倉吉市の三和段ボール工業。段ボールという私たちの暮らしの身近にあるもので、SDGsを意識したエコ商品の開発やニュースポーツへの支援などを行なっているほか、長年地域住民が使っていて定期的に清掃活動をしてきた近所の公園を拠点に、新しいコミュニティづくりや交流の機会を作る目標もあるという。旗振り役の松本公彦常務に話をうかがった。

段ボール会社の変革

創業63年の三和段ボール工業は、6年前に3代目の森英司社長が就任。数年後に地元銀行を退職した松本さんが加わり、次々に新しいことに挑戦している。

「いろんなものを作るようになってきているんです。自分がずつとサッカーに携わっていることもあって、例えば、元ガイナレ鳥取の選手がされているサッカー教室に使うパネルやサッカーのグラウンド脇に立てるピッチボードを段ボールで作ったりしています」



松本公彦さん

銀行員時代に磨いた行動力で、さまざまな業種の人たちとすぐにつながり、なんでもやってみる姿勢で社業の可能性を広げている。ユニフォームやロゴも一新したかと思えば、昨年4月に導入したデジタル印刷機によって製品の幅が広がったこと

3 すべての人に 健康と福祉を	8 働きがいも 経済成長も	9 産業と技術革新の 基盤をつくろう	10 人や国の不平等 をなくそう	11 住み続けられる まちづくりを	12 つくる責任 つかう責任	17 パートナーシップで 目標を達成しよう
-----------------------	---------------------	--------------------------	------------------------	-------------------------	----------------------	-----------------------------

企業と地域の
つながり方





で、プラスチックだったものを段ボールにするなど、エコ活動にも力を入れる。

自社の改装をお願いした緑で、鳥取市の懸樋工務店と連携したSDGsイベントも開催。古くなったロッカーをかつこよくリサイクルすることを塗装イベントにしてしまおうなど、社業を軸にしながら地域に飛び出し、つながりを生んでいく動きが増えた。

地域の輪を広げていく

挑戦し、前に進む企業にはいろんな話が舞い込んでくるのかもしれない。

「近所のおっちゃんが、私財を投げ打って、インドア認知予防ゴルフ（インゴル）というニユースポーツを広めようとしていてうちに来るんですよ。段ボールを重ねてグリーンやクラブを作るといので、提供したんです。せっかく頑張ろうとされているのでどうせなら応援しようや、という話になりましたね」

用具が完成すると、会社の敷地を開放してインゴル体験会を開催。社員や地域の人たちが集まって、段ボールを使ったスポーツを楽しんだ。



「いろんなことをやっていきますが、まだ儲けにはなっていない（笑）」と松本さんは言うが、好きなことや地域に関わることと段ボールを絡めることで、確実に事業を知ってもらう機会は増えている。

コンパクトシティ構想

「そもそも、弊社は昔から地域に貢献したいという意識が高いのかもしれない」

歩いてすぐのところにある上井東公園。そこにある外灯・放送器具は創業者時代に寄贈しており、現在は月に一回全社員で清掃活動をしている。松本さんは、この公園を将来的にはうまく活用していきたいという。

「自分自身、銀行員時代から考えていたことなんです。人口減少社会の中、これからは行政が隅々までサービスを行き届かせるのは難しいので、自分たちでやらないといけない。外から大手を引っ張ってくるよりも、地域がコンパクトにまとまり、賑わいが生まれ、地場の企業が10%ずつでも良くなるようなまちづくりが必要になってくると思います」

人口減少の波やコロナ禍もあり、地域のお祭りも激減。そんな時代でも、公園が一つの拠点として、新しいコミュニティや交流が生まれる場にできないかと夢を膨らませる。

松本さんは、鳥取大学を応援する約200社が加盟する鳥取大学振興協会のコーディネーターを担うなど、とにかくよく動いてつながりを生んでいく。固定概念にとらわれず、その先に見据えるのは事業の発展、そして元気な地域の未来だ。

三和段ボール工業株式会社

所在地／倉吉市上井52番地
連絡先／電話：0858-48-1111
Webサイト／<https://www.sanwa-d.com/>

Webサイト



facebook



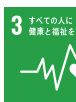
Instagram





食品ロスを減らし、より良い地域社会に。

[西部] 株式会社米子青果



企業と地域の
つながり方



「ちょうど社内でも環境配慮型市場を目指し始めた頃でした。返品される商品や、従業員が『売り物にならないだろう』という判断の基、売る前に廃棄する商品があったのですが、社内の情報システム刷新をした2021年に食品ロスが数字として明確に出て、課題感という

食品ロスへの危機感



上田剛史さん

事業の課題が、社会の課題と密接していることがある。米子青果が直面しているのが食品ロスだ。食べられるにも関わらず廃棄される食品のことで、日本全体で472万トン（2022年度）にもなる。食品ロスを子ども食堂に提供するなど、他の社会課題に役立てようとする動きや食品ロスへの関心を高めようとする動きも出始め、地域貢献の意識が高まっている。同社の上田剛史副社長に話をうかがった。



「私たちの仕事は、生産者さんたちがいて成り立つ商売。一生懸命作った青果物が人に食べしてもらおうことなく、捨てられている現状を考えたら、このままじゃいけないと思いました」
廃棄をするならどこかで使ってもらえないだろうかと考え、メディアのニュースで食品ロスを子ども食堂に提供している例を見つけた。早速、米子市内での受け入れ先を探し、子ども食堂「ネバーランド」（辻聡代表）とつながった。

地域への貢献につなげる



辻聡さん

辻さんは2017年に子ども食堂をスタートし、2021年にフードバンクよなごを立ち上げた。廃棄される食品を寄贈してもらい、食べ物を必要としている人に無償で提供したり、子ども食堂で活用したりするという。
「週に一回、米子青果さんに受け取りにこさせてもらっています。それをフードバンクに持たれた人に持って返してもらえよう、広げた新聞紙一枚の上に食べ物を振り分けていくんです。ある時ざっと計算したら一軒あたり3000円くらいの食品になりました。それが25〜30軒来られますから、大きな貢献です。本当に助かっています」
米子青果ではもう一軒の子ども食堂「レインボー・ツリー」にも提供しており、ある取引先から返ってくる商品1日分の三

分の一は、子ども食堂への提供に使われているという。

社会全体の意識を変える

目の前のできることを少しずつ改善しているところだが、社会全体で考えると食品ロスの問題はより難しい状況になってきている。温暖化の影響で、安定的な収穫量を確保しづらくなつた。気温が高いと当然ながら鮮度劣化も早くなり、「うちに来る時点でこれはもう販売できないな…、というものもあります」と上田さん。その他にも例えば、2024年の物流問題も、作物の鮮度劣化に影響を与えてい

る。以前なら翌日に届いていたものが翌々日になってしまふなど輸送に時間がかかってしまふ分、売り物にならず廃棄する量が増加している。また、直接食品ロスに影響しているわけではないが、生産者が減少しているという点も、長い目で見ると、食の安定供給を脅かす見過ごすことの出来ない問題である。このように地域の食を取り巻く状況が複雑化している。いかに無駄なく、無理を強いることなく、限りある資源を循環させていくか、更なる思索と実践が必要であろう。

し、食品残渣を染料にしたもので染めたデニム生地で商品を開発。食品ロスの問題にも関心を持ってもらうきっかけになることに期待している。この数年で蒔いた種がどう芽を出していくだろう。

「子ども食堂やフードバンクへの青果物の提供の取り組みを始め、社員に参加したい希望者を募ったところ数名から手が挙がり、商品の用意をしてくださいたいです。そうしていると、うちに来た八百屋さんたちがそれを手伝ってくれるようになったり、これまで廃棄していたものを『まとめていくらで買おうわ！』こんなの捨てるのはもったいないから売り直せよ」と言ってくれたりするんです」

嬉しそうに話す上田さん。意識の変化は行動になり、人から人へと確実に伝播している。



「以前より青果物が作りにくい環境になってきている状況を、販売するお店も、それを買う消費者もみんなが理解しないとダメですね。ちよつとしたことで返品になっては…。そのためにももつと農業の現状を発信をして、この状況をより多くの人たちに知ってもらいたいですね」

昨年から岡山のジーンズメーカーと大阪の染料工場と連携

株式会社米子青果

所在地/米子市両三柳193-1
連絡先/電話:0859-22-3245 (代表)
FAX:0859-22-4107
Webサイト/<http://yonagoseika.co.jp/>

Webサイト



つな がる フォーラム



とっとり県民活動活性化センターが11月4日、設立10周年記念つながるフォーラムを鳥取市のとりぎん文化会館で開催した。これまで同センターとともに地域づくりやコミュニティづくりを進めてきた県内の活動団体の皆さんをはじめ、多くの方に足を運んでいただいた。

第1部では、同センター理事長の毛利葉の挨拶に続き、来賓の亀井一賀鳥取県副知事からご挨拶をいただいた。

とっとり県民活動活性化センター 10年の歩みとこれから

とっとり県民活動活性化センター

理事長 毛利 葉



とっとり県民活動活性化センター
理事長 毛利 葉

心がけ、各職員が現場に足を運ぶことを大切にしてきた。通常業務以外で印象に残っているのは、2016年10月の鳥取中部地震の際に、県が設置した震災復興活動支援センターを運営し、2023年度まで復興に向けた活動支援や災害ケースマネジメントに取り組んだことである。2019年には、民間主導でのSDGsのプラットフォームを立ち上げた。

多くの関係者の方々のお力添えもあり、とっとり県民活動活性化センターが10周年を迎えることができましたこと、改めて感謝申し上げます。2012年にボランティア市民活動推進プロジェクトが県庁内に作られ、準備期間を経て当センターを設立したのが2014年1月23日。鳥取県が設立する初めての一般財団法人ということもあり、県の担当者と一緒に検討したり、一緒に地域を回ったりしたことを思い出します。「手を取り合って鳥取の元気づくりを」というスローガンから「てとり」という愛称ができ、現在の情報誌の名前にもなっている。

ととりは設立以来、行政とは違うアプローチでの支援活動を人口が少ない鳥取県だからこ

そ、地域や個人が抱えている課題の解決や、新たな挑戦が生まれていくために、つながることでお互いの力が響き合い、新しい熱が生まれていくような関係づくりが大切だ。そんな動きを促し、伝え、繋げ、解決すべき課題を共に考えていく役割が私たちに課せられていると思う。私たちのような活動のことを中間支援と言うが、官と民の、非営利と営利の、異なる文化や分野の、課題と課題の中間。そして、お金や人材、地域の資源と活動団体の中間において、それをつないで支援する役割があると思う。

空き家活用の取り組みをしているNPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会は、地域課題解決を目指す中間支援活動を県内各地に呼びかけているし、新たな動きとして、東日本大震災の被災移住者を支援してきたとっとり震災支援連絡協議会が災害支援のネットワークを構築しようとして挑戦している。また、中堅世代が連携してコミュニティ財団を作る動きもある。他にも、まちづくりでは琴浦まちづくりネットワークやNPO法人こうふのたより、災害支援では日野ボランティアネットワーク、子育て分野ではコミュニティを作っているTottori Mamasなどもある。地域や分野ごとにある「中間」を支えていく人材や組織づくりを進めていくことが大切だ。

して定年の年齢引き上げに伴って60歳代の方が地域に出ていく地域デビューも遅くなっている。地域コミュニティの中間支援を行う団体や市町村のみなさんと連携し、住民自治や県民参画の支援を今後も行っていく。

三つ目は、「人」。団体の組織運営や組織基盤の強化とともに、人材育成の必要性を感じている。ととりも職員スタッフが要だ。設立以降、中核となる職員は継続して勤務しており、それも各活動団体の熱い思いに触発され、続けられているものだと思っている。活動団体や地域の皆さん、今後も叱咤激励をお願いしたい。

NPO法ができて25年を超え、世代交代が迫られているNPOも増えている。ボランティアだけでなく地域や団体は続かない状況もあるが、逆に、ボランティア精神こそ民間非営利活動の自然循環を動かすエネルギーがあることも確かだ。パッションを持ち、冷静な組織運営を担う人材を生かす環境整備を目指しながら、良いことはなんでも導入し、みなさんとより良い鳥取県の未来を作っていきたいと思っている。



来賓の亀井一賀鳥取県副知事からご挨拶



記念講演

「参加」が創り出す 人口減少社会の希望

講師 / 山崎 亮 さん

株式会社 studio-L 代表、関西学院大学建築学部教授。
コミュニティデザイナー。



人口減少社会の中で地域の有り様が劇的に変わる今、まづぐりも視点を変え、今やこれからの時代に合うやり方を探していく必要がある。全国各地で地域課題やコミュニティづくりに関わってきた山崎亮さんをお迎えし、他県での成功事例などをもとにこれからの時代に求められるまづぐりについてお話しただい。

◎ 地域にあるものを生かした関係づくり

鳥取県は東西に長い県ということから、対象エリアが似ているプロジェクトの参考事例として「瀬戸内しまのわ2014」と「さとやま未来博」を紹介する。「しまのわ」は、2014年に広島県と愛媛県の共同イベントとして開催した。「観光から関係へ」をコンセプトに、単に観光客を喜ばせるのみではなく、普段から地域の方々が行っていることをブラッシュアップして体験してもらうことで、関係性を築けるようにしたのである。その地域で暮らす人たちにとっては珍しくないことでも、観光客にとって価値があることがあるのだ。プログラムは、「自分たちが今やりたいこと」をテーマに構築し、最終的には280のプログラムが生まれたが、110は既存のもので、新たに考案したものは170だった。それらの活動を始めた人たちがゆるやかにつながりながら、「しまのわ」終了後も活動を継続してくれることを願っていた。実際、10年経った今もこの活動は続いている。「しまのわ」では、「わかりや

すくする」「かっこよくする」「つなぐりやすくする」「居心地よくする」の4つを柱として支援を行った。5〜10人規模のワークショップを各地で開き、コミュニケーションやPRのためのポスターの作り方、写真の撮り方講座など準備段階から、運営面までアドバイスを行った。



講師 山崎 亮さん

◎ 人から人へ、楽しさは伝播していく

新たに生まれたプロジェクトとして「おかんアート美術館」を紹介する。自分の暮らす地域の街並みを見てもらいたいという75歳くらいのおばあちゃん5人から相談を受け、一人のご自宅に伺った際に家の中に手づくり作品（おかんアート）が溢れていた。ヤクルトの容器に爪楊枝を張って一輪挿しを作ったり、余った布の端切れで親指しか入らない帽子を作ったりしており、おばあちゃんたちはそれらを作るのが楽しいのだそうだ。そこから「ここを『おかんアート美術館』にしたらどうか」と提案してみた。「そんなもん

◎ 活動人口を増やし、楽しさを自給する

定住人口が減る中、交流人口を増やすということも一つの方法だが、定住人口の中でまづぐり活動をする人口の比率を高めていくという方法もある。定住人口は減っても、活動する人口が少数精鋭化していくことが未来をよくしていく。10年間で人口が8,000人に減ったが、

誰も見に来ないわよ」との反応だったが、「一週間に20人来てくれたら20人の友達が増えますよ」と勧め、開催してみることとなった。おばあちゃんたちは家に人が来てくれるのが嬉しくなり、来た人にお土産を渡したくてたまらなくなった。そこで、折り紙で作った箱をお土産に配り始めた。もらった人にも、渡したおばあちゃんたちにも嬉しい気持ちで連鎖し、最終的には一週間で800人も、最終場があった。「おかんアート美術館」を通じて多くの関係性が生まれ、この5人組は来てくれた方々を訪ねて様々なところに旅行している。このような関係性を生むプログラムが280展開された。

まづぐり活動をしている人が100人から1,000人へ増えた場合、活動人口比率としたら増えていることになる。活動人口比率の高いまちの方が活気があり、仲間も拡大していくのではないだろうか。そういうまちを鳥取県内に増やし、顔の見える関係で「一緒に活動をやってみよう」と誘い合ったり、支え合ったり、つながりあったりすることが重要だと考えている。人口が減ることを「縮減」や「縮退」と表現するが、人口が減っても活動人口の比率が増えていくことは「縮充」だと言える。縮んで充実していく、そういう地域づくりが進められるといいだろう。そしてもう一つ、「楽しさ自給率」も重要ではないだろうか。お金を使って楽しさを外から購入するのではなく、自分たちで楽しさを作れたら成功だと言ってもよい。自分で楽しさを作る力、面白い技術は人生を豊かにしてくれる。縮充の時代、活動人口を増やす工夫をし、楽しさ自給率の高い鳥取にしていきたいと思います。





プラットフォーム交流会

第2部では、「巻き起こせ！ミラ・クルの風」とつとりのミライをツクルつながりの場」と題し、原田博一さん（株式会社イミカ代表）がファシリテーターを務め、NPO法人、まちづくり協議会、企業、社会福祉協議会、ボランティア団体など県内のさまざまな方々による交流会を開催した。

2024年度から始まった「ミラ・クル」とつとり運動」。7月にプラットフォームを設立し、毎月一回の交流会を通して、分野で地域活動に関わる団体のつながりを生み、お互いがそれぞれの活動に共感し、共に協力しながら地域課題の解決を目指して活動をしている。

交流会では県内の東部、中部、西部のマップを作り、各地域で活動している団体の名前と場所を記載。参加者はそれぞれが関心を持った団体に応援のメッセージや、聞いてみたいことなどを書いて貼った。その後は、各テーブルにテーマを設置し、それぞれが希望するテーブルに座って意見交換をするグループワークを行った。テーマには、





第2部

ミラ・クル・とっとり

「子ども・子育て」「移住・定住」「障がい者支援」「学生・若者」「地域づくり」など10テーマがあり、テーブルを囲んで楽しげな様子の中、真剣な話し合いが行われた。

琴浦町で2年前から地域づくりの活動を行っている「コトウラ3区」代表の丸山希さんは「地域課題を自分たちでどう見つめていくか、私たちは主婦の集まりですが、山や海や川で遊ぶことなどを通して、みんながつながっていくような活動をしています。地域のことを薄目で見ているのではなく、私もそう思う！と手を挙げてくれるように、こういう横のつながりはとても良いなと思いました。いろんなヒントをいただきました」と話していた。

長年地域づくりに関わる人もいれば、若者世代も参加。鳥取環境大4年の藤原洋希さんは「岡山県出身ですが、将来は行政で働くことや政策に興味があります。行政だけではできないことが増える時代だと思いますので、こういう会に参加してみたいと思いました。いろんな人の話を聞けるのも面白いし、とても勉強になりました」と笑顔を見せた。

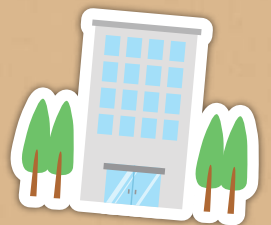
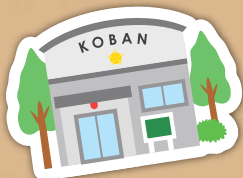


地域と学校の 架け橋を担う高校生

今回は学校の内外で
多岐にわたる活動をしている
鳥取中央育英高等学校の
谷本さんにお話を伺いました。

谷本 晴彦さん

鳥取県立鳥取中央育英高等学校
2年





Q1. これまで活動について教えてください。

学校では生徒会副会長を務めていて、高校生フォーラムで発表をしたり、新聞部では地域の新しいお店などを取材する活動もしています。学外でも地域の方と一緒にイベントに出店して、駄菓子を売る活動などを行っているところです。

Q3. 活動を通して何か気づきや学びなどはありましたか？

社会的になったと思います。実は中学校まで不登校で、外に出づらいつ感じがありました。それがこの駄菓子の企画を行うようになってから、地元の方が今まで以上に気さくに話しかけてくれるようになって、外に出るのが苦ではなくなってきました。

また、高校への進学の際にいくつか選択肢があった中で、体調のこともあり家に近い中央育英に進学したのですが、最初はそれで良かったのか、別の選択をした方が良かったかなと少し後悔することもありました。でも今では、駄菓子の企画で子ども達の楽しそうな顔をみたり、こうして色々な人と企画が出来ているので、この選択で良かったなと思えるようになりました。



Q2. なぜ駄菓子を売る活動をはじめたのですか？

高校の授業の一環で地域の大人の方とお話する機会がありました。その中である地域の方が「駄菓子っていいよね」って言ったんです。そこから色々話をしているうちに、イベントなどで駄菓子を売る企画をやるとうということになりました。最初は正直「駄菓子？なんで？」と思っていました。

その後、鳥取大学の先生を紹介していただいて相談しました。大学の先生には早々に「あなた、駄菓子にあまり興味ないよね。なんでやりたいの」と言われてしまい、困りました。ただ、先生に色々とお話をする中で、将来教員を目指していること、そして教員になれば子ども達と関わることになる、結局自分は子どもと関わる活動がしたいのだと気づきました。それからは、その方法の1つとして駄菓子を売るこの企画は自分の関心ごとと結びつくのではと思えるようになりました。

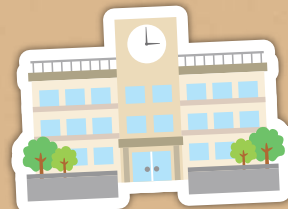
そこから大学の先生や地域の方、大学生などに手伝ってもらいながら、「つながる学校プロジェクト」の一環として駄菓子を売る活動を始めました。

Q4. 今後の活動の予定について教えてください。



先日も小学生と一緒に活動してくれました。本人達も楽しそうでしたし、親御さんからも「いい経験をさせてもらった」と言ってもらえました。値段決めや仕入れなども自分達で考えてもらうようにしているので、小学生にとっても良い経験になっているのではと思います。

自分が卒業しても活動が続くように、小学生や中学生に声掛けをして、引き続き活動に関わってもらえるようにしています。





企業と地域の



編集後記

災害といえば、地震や台風、大雨を想定していたが、今年は年明けから大雪と山火事だ。これらは地球温暖化による気候変動の影響といわれている。気候変動は、気象だけでなく、人間の生活にも様々な影響を及ぼしている。今、自分にできることに取り組みながら、改めてSDGsについて考え直す。

(小林 綾子)



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs: 持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)
2030年までに達成すべき17の国際社会共通の目標
169のターゲットで構成

当センターは、SDGsに取り組む個人、団体等の情報交換・発信の場となる、「とっとりSDGsプラットフォーム」の事務局として、SDGsを推進しています。



会員随時募集!



<https://sdgsnwt.jimdofree.com/>

てとり「てとり」はとっとり県民活動活性化センターの愛称です。

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：毛利 葉
編集人：小林 綾子
取材・編集：藤田 和俊（合同会社僕ら）、寺坂 純子、椿 善裕、池淵 菜美、谷 祐基、世瀬 あけみ、山部 さおり
写真：藤田 和俊（合同会社僕ら）
写真提供：株式会社鳥取銀行、中国電力株式会社鳥取支社、三和段ボール工業株式会社、株式会社米子青果、子ども食堂ネバーランド、長曽我部 まどか
デザイン：山本印刷株式会社



「てとり」バックナンバーはこちらから。

2025年3月17日発行(第22号)

お問合せ/公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター URL <https://tottori-katsu.net/>
〒682-0023 鳥取県倉吉市山根557-1 パープルタウン2階
TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470 E-mail info@tottori-katsu.net